



本会名誉会員 椿 啓介先生は  
平成17年8月18日逝去されました。  
慎んで弔意を表します。  
日本微生物資源学会

# 椿 啓介先生 御略歴

## 1. 経歴

大正 13 年 6 月 21 日生まれ

昭和 23 年 3 月	東京農業大学農学部農芸化学科卒業
昭和 23 年 4 月	財団法人長尾研究所
昭和 34 年 8 月	理学博士（広島大学）
昭和 34 年 10 月	財団法人長尾研究所主任研究員
昭和 36 年 6 月	財団法人発酵研究所
昭和 49 年 4 月	財団法人発酵研究所副所長
昭和 51 年 4 月	筑波大学生物科学系教授
昭和 63 年 3 月	筑波大学教授定年退官
昭和 63 年 4 月	筑波大学名誉教授
	日本大学薬学部教授
	東京農業大学客員教授
平成 6 年 3 月	日本大学教授定年退官
平成 7 年 4 月	東京農業大学客員研究員
平成 17 年 8 月 18 日	死去

## 2. 主な学会活動

日本医真菌学会	評議員・監事・名誉会員
日本菌学会	評議員・理事・学会長（昭和 60～62 年）・名誉会員
日本微生物資源学会	監事・名誉会員
日本防菌防黴学会	理事・参与
アメリカ菌学会	名誉会員
イギリス菌学会	Centenary Fellow
国際菌学連合	副会長（昭和 58～平成 2 年）
国際菌学連合アジア菌学推進委員会	委員長（昭和 58～平成 2 年）・名誉会員
第 3 回国際菌学会議（東京）	総務幹事長（昭和 58 年）

## 3. 主な社会活動

昭和 51 年～	財団法人発酵研究所評議員
昭和 56 年	日本学術会議 IUBS 研究連絡委員
昭和 60 年～平成 5 年	農林水産省生物遺伝資源協議会委員
昭和 60 年～平成 7 年	理化学研究所微生物系統保存運営委員会委員
昭和 61 年	環境庁生物保護対策検討委員会委員
昭和 62 年～平成 2 年	千葉大学真核微生物研究センター運営評議会委員
平成 2 年～平成 6 年	国立遺伝学研究所系統保存委員会委員
平成 9 年	日本植物分類学会委員会委員
平成 11 年	千葉大学真菌医学研究センター外部評価委員
平成 11 年～平成 17 年	茨城県自然博物館資料評価委員
平成 12 年～平成 17 年	財団法人日本きのこ研究所評議員

## 4. 主な受賞

平成 5 年	第 3 回南方熊楠賞
平成 5 年	日本大学表彰

# 椿啓介先生を悼む

椿啓介 博士 (大正13年～平成17年)

In memoriam : Dr. Keisuke Tubaki (1924-2005)

筑波大学名誉教授椿啓介先生は、2005年(平成17年)8月18日に81歳の生涯を閉じられました。ここに深く哀悼の意を表します。

一昨年の椿先生を囲む忘年会で旧き懐かしきことを楽しく話させていただいたのがつい先日のように感じられます。また、今年の年賀状にもお元気の一筆添えていただきましたので、この度の訃報に接し、驚愕するとともに非常に残念でなりません。

椿先生は1924年(大正13年)6月21日に東京でお生まれになり、1948年3月に東京農業大学をご卒業後、財団法人長尾研究所に入所されました。その後、1961年に大阪の財団法人発酵研究所(IFO)に移り、さらに1976年には筑波大学教授に就任されました。1988年のご退官後に、筑波大学名誉教授になられ、ただちに日本大学教授に着任するとともに、東京農業大学客員教授としても後進の指導に多大なご尽力をされました。この間、1959年に広島大学で理学博士の学位を取得され、日本微生物保存連盟の幹事(1983-1984)をはじめ日本菌学会長(1985-1987)や国際菌学連合(IMA)副会長(1983-1990)など、内外の菌学関係の要職を歴任されました。さらに、IFO評議員や数々の研究プロジェクトリーダーとしてご活躍されました。これらのご功績と菌学に関する深い造詣により、先生は1993年に第3回南方熊楠賞を受賞されました。

椿先生のIFO在職期間(1961-1976)のうち、10年間ほど私は直接の部下として微生物について教わりました。そこで、先生のIFO時代の研究業績や人柄について触れさせていただきたいと思います。

椿先生は、不完全菌類の分類体系に関して、有性世代と無性世代との関係を踏まえながら、分生子形成様式という新たな分類形質に着目した“Tubaki System”を提案され(服部植物学研究所報告20:142-244(1958)および発酵研究所年報1:25-54(1963))、これらを基にしたHughes-Tubaki-Barron Systemがその後普及しました。この不完全菌類の分類体系により世界的に有名になられた椿先生は、その才能をさらに開花させるべく1961年にIFOに招聘されたとお聞きしております。IFOでは、特に海生菌類や底泥の菌類フロアの調査ならびに海外菌類調査を精力的になされました。また、在職後半はリター菌類の生態学的調査なども行っておられました。言うまでもなく、これらの成果は多くの論文や著書として発表されています。

菌株保存については保存機関の意義と重要性、また、乾燥標本の必要性を常に意識されておられました。例えば、IFOに寄託された菌株で既に長期間保存されている菌株と寄託者が保存している同一菌株とを互いに比較してはどうかと提案され、実行されました。保存機関によって保存方法が異なるのに性状が変化していないはずはないと、菌株の保存に関して先駆的な考え方をおもちでした。ただ、常に状況を把握して研究を進めておられましたが、反省点として「採集に多く行くと分離と同定に追われ、つい菌株の保存をおろそかにしてしまう」と言われておられました。例えば、日本の海生菌類の分布調査の際、つい重要な菌株の保存を忘れ、気が付いたときには既に死滅していたなどと悔やんでおりました。

椿先生は話題が豊富なために周りにはいつも多くの人々が集まり、IFO時代は“椿詣で”とまで言われるくらいに多くの方々がご意見を伺いに来ていました。国内のみならず、国外からも多くの研究者が常々訪問され、わいわいがやがやと楽しく議論をしていました。先生の人柄は温厚で優しく、私などは怒られた記憶がありません。全くわからないのに丁寧に教えていただきました。時には「全く知らないほうが吸収しやすい」といって慰めていただきながら、育てていただきました。また、いかなる問合せにも丁寧に返答するように教わりました。自らも親切に対応しておられましたので、周囲から信頼されてきました。このような著名な菌学者である椿先生と一緒に仕事ができることを先輩たちや関係者から羨ましがられたものです。お人柄はIFOを去って大学に移られてからも変わることなく、多くの方々が先生を慕って来訪されたとお聞きしました。

世界的な菌学研究者の一人がまた去られたことはとても大きな損失であると思うのは私だけではありません。あらためて、椿啓介先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

(大阪府池田市畑4丁目7-9 伊藤忠義)